トピック展示

火縄銃の世界

Feature Exhibition The Matchlock Guns of Japan

平成28年
7/12㊋
▼
9/4㊐

はじめに

日本全土が戦乱のただ中にあった16世紀半ば、大隅国（現 鹿児島県）の種子島に火縄銃が伝来しました。この出来事は、「鉄砲伝来」の名で教科書でも必ず触れられるほど大きな事件として知られています。しかし、その伝来後、火縄銃がどのように日本に根付き、そして独自の発展を遂げていったのかについては、これまでほとんど注目されることがありませんでした。

本展は、火縄銃の伝来から発展、そしてその終焉までを通観することで、日本人と火縄銃のかかわりについてご紹介します。一見地味で、どれも同じように見える火縄銃ですが、実は様々な工夫をこらし、産地ごとに豊かな個性がみられます。本年度最初のトピック展示である本展では、これまで顧みられることの少なかった火縄銃の奥深い魅力に迫ります。

No.⑰

第1章　アジアの火砲と火縄銃の伝来

アジアでは火薬を用いた兵器が早くから使われていました。例えば、鎌倉時代に起こった元寇の際に元軍が用いた「てつはう」があります。これは、火薬とともに鉄片や陶片を球形の陶器に詰めた一種の炸裂弾で、実際に佐賀県・鷹島沖の海底からも当時の「てつはう」が見つかっています。一方、砲身に火薬を詰め、これを爆発させることで弾を発射させるという、後の火縄銃と同じ仕組みをもつ火砲が「手把銅銃」（＝ハンド・カノン）【No.③】です。溶けた銅を鋳型に入れてつくったこの銃は、中国・明時代（1368-1644）の初期から使われており、朝鮮半島でも同様の火砲が数多くつくられていました。こうした銅銃は、火縄銃登場以前のアジアの火砲として位置づけられるものです。

慶長11年（1606）に南浦文之が記した『鉄炮記』によれば、天文12年（1543）に種子島に一艘の大船が漂着し、五峯という人物と一緒にこの船に乗っていたポルトガル人から鉄砲がもたらされました。当時、種子島を治めていた種子島時尭は、彼らから買った火縄銃をもとに、地元の刀鍛冶であった八板金兵衛清定にその製造を任せ、また家臣に火薬の製法を学ばせたそうです。これが史上有名な「鉄砲伝来」のいきさつです。

『鉄炮記』の内容については、未だ検討すべき点も少なくありません。しかし、そこには幾つもの重要な事実が見え隠れしています。まず、当時の種子島は東西交通の要衝として様々な文物を積んだ船が往来していた点です。また五峯は、当時の倭寇の大頭目として知られた王直と言われています。倭寇は日本や朝鮮半島、さらには中国の東南部沿岸地域から東南アジアまでを股にかけて、通商（密貿易）を担う存在でした。つまり、火縄銃の伝来には倭寇が大きな役割を果たしていたと考えられるのです。更に重要なのは、種子島が単なる「伝来の地」ではないことです。火縄銃を買い受けた島主の時尭は、その製造を刀鍛冶に任せています。これは、当時この島にそれだけの金属加工技術があったことを示しています。

それでは、火縄銃がそれまでの火砲と大きく異なる点は、一体どこにあるのでしょうか。それは、弾を打ち出す機関部にその特徴があると言っていいでしょう。カラクリとも呼ばれるこの部分こそが、それまでのシンプルな火砲には見られなかった工夫です。また銃身は、鉄でつくられています。特に、日本の火縄銃は鋳造ではなく、鉄板を巻き上げて銃身をつくるという、高度な鍛造技術で製作されている点も、注目すべき点です。

No.③

第2章　諸国の鉄砲鍛冶と砲術流派

種子島に伝来し、当地で国産化に成功した火縄銃は、その後次第に日本全国へと広がっていきます。伝来の翌年には、紀伊の根来（現 和歌山県岩出市）、更に和泉の堺（現 大阪府堺市）へと伝わったと『鉄炮記』には記されていますが、当初は実戦用ではなく一種の贈答品として扱われていたようです。それが、各地で合戦の規模が大きくなるにつれて、武器として注目されていきます。特に、織田信長や豊臣秀吉、徳川家康による統一政権が成立していく過程で、その使用は飛躍的に増大し、なかでも国友（現 滋賀県長浜市）【No.㉕】や堺は、国内有数の鉄砲産地として名を馳せていったのです。とりわけ家康は、天下統一の総仕上げとして大坂城を攻撃するにあたり、各地の鉄砲鍛冶に大砲や火縄銃を大量に作らせています。この時期が、日本の火縄銃使用のピークだったと言えるでしょう。

またこの頃、各地に様々な砲術流派がうまれました。例えば、毛利伊勢守高政が創始した伊勢守流、鉄砲の名手として知られた稲富一夢が興した稲富流、播磨・池田家に出仕した関流などが挙げられます。

その後、日本は江戸時代を通じて概ね平和だったにもかかわらず、引き続き多くの砲術流派が存続しました。火縄銃は、兵器としての実用を失った一方で、弓術や馬術と同様に武士が嗜むべき武芸のひとつとして捉えられていったからです。また、各地で個性豊かな火縄銃が製作され続けました。たとえば、堺は装飾を重んじる傾向があり、銃床に真鍮板を切り抜いた装飾板を付けたり、銃身に象嵌を施すことがしばしば行われました【No.⑭⑮】。また、中国地方では古来刀剣の産地として知られていた備前（現 岡山県）が名高く、丸い銃身と黒みを帯びた銃床が特徴的な火縄銃【No.⑰】がつくられていました。そのほか、四国も特に土佐（現 高知県）や阿波（現 徳島県）が火縄銃産地として知られています。

一方、九州では薩摩筒【No.⑳㉑】と呼ばれる個性の強い火縄銃が作られていました。通常、火縄銃は銃身を銃床と組み合わせる際、目釘を打ち込んで固定します。しかし薩摩筒は、幅広の責金を嵌めて固定するのが特徴です。また、火蓋や火鋏は鉄製を基本とし、他地域の火縄銃に一般的な真鍮を用いることはほとんどありません。このように、一見するとどれも同じように見える火縄銃も、実は様々な個性に彩られているのです。

第3章　火縄銃、その後

「鉄砲伝来」以後、約300年に渡り日本各地で作り続けられた火縄銃。しかし、幕末になると火縄銃を取り巻く状況は大きく変化していきます。この頃、欧米列強では急速に銃火器の改良が進んでおり、以前とは比べものにならないほど、軍事力に大きな開きが生じていました。危機感を覚えた幕府と各藩は海防と軍制改革に力を注ぎ、和式の砲術以外にも西洋流の砲術を学ぶ機運が高まっていきます。ここにきて、日本の火縄銃は大幅な改良を迫られることになったのです。とは言え、西洋から輸入された最新式の銃は形が大きく異なるため、当時の日本人には扱いにくいものでした。そこで、それまで使い慣れた火縄銃のカラクリ部分をそっくり取り替えたかたちで改造が行われることが多かったようです。

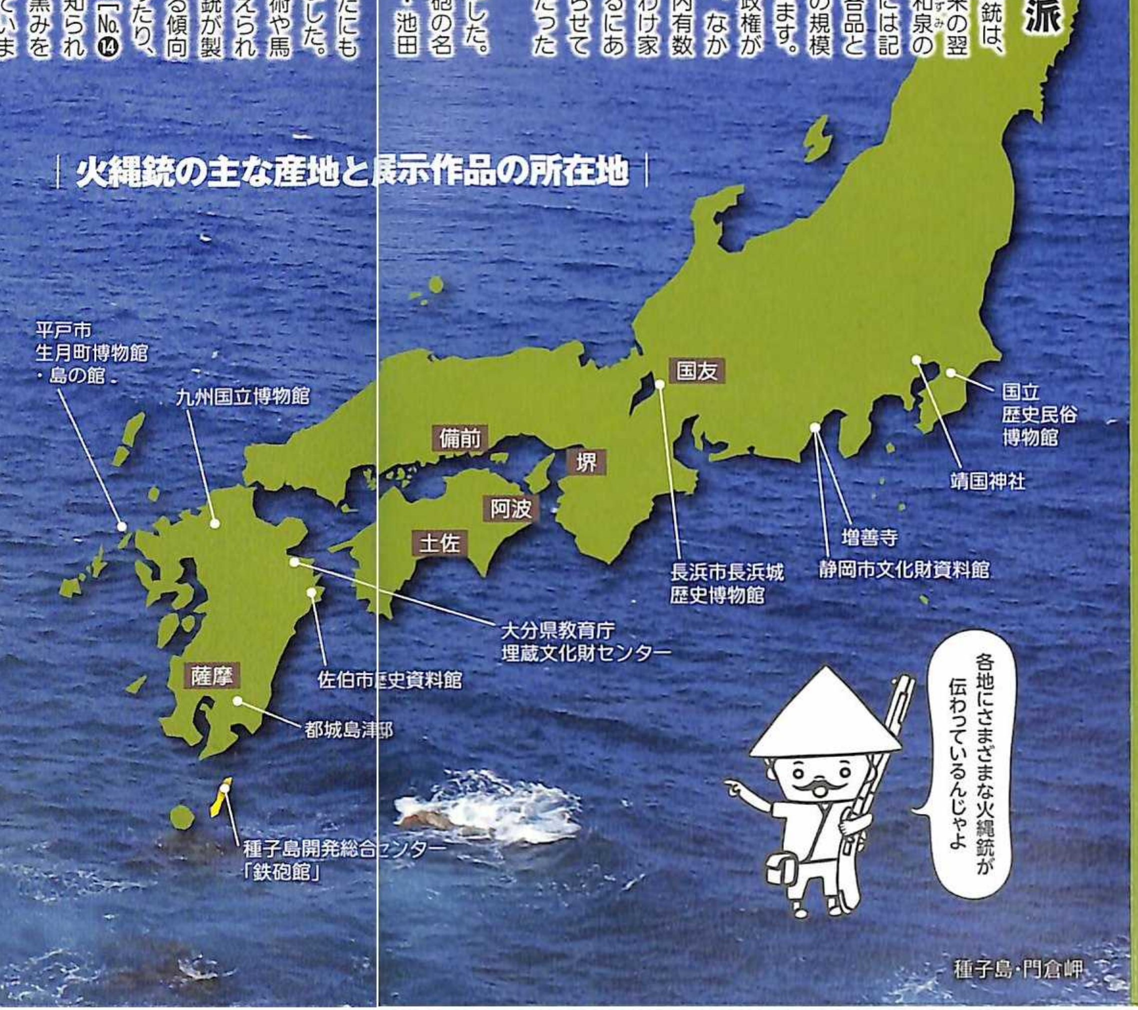
結局、新時代の到来のなかで、火縄銃は「時代遅れの武器」としてその役割を終えることになります。しかし、長年に渡って培われた火縄銃製作の技術は、各地で別のかたちで生かされていきました。例えば、火縄銃伝来の地である種子島では、それまでの鍛鉄技術を駆使して家庭金物である包丁や鋏を製作するに至りました。現在、当地の刃物は鹿児島県の伝統工芸として指定を受けています。また、堺でもそれまでの製銃技術が自転車産業の発達に大きく寄与したと言われています。さらに九州では、それらとはまた別の興味深い展開を迎えます。幕末から明治時代、九州北部の沿岸地帯は、捕鯨漁で栄えました。なかでも長崎県の平戸一帯には日本最大の鯨組が成立し、アメリカから最新の捕鯨銃が導入されました。実はこの捕鯨銃を、伝統的な火縄銃の製作技術を駆使して模倣したのが、平戸の鉄砲鍛冶だったのです。見た目はそっくりですが、オリジナルの捕鯨銃が鋳造であるのに対し、あくまで鍛造でつくりあげたものとなっており、しかも銃身にはわざわざ銘を刻んでいます【No.㉗】。火縄銃を生み出した伝統の技術は、見事に新時代に適応していったのです。

出品目録

◎＝県指定文化財　○＝市指定文化財

番号	作品名称	員数	法量（cm）	時代	所蔵
1	大筒「関軍兵衛尉昌信（花押）」	1挺	全長140.0	江戸時代 17世紀前半	千葉・国立歴史民俗博物館
2	虎蹲砲「崇禎四年十月日鋳成匠趙士男虎蹲砲第二十位重四十九斤足重四斤六両」	1門	全長53.3	明・崇禎4年 （1631）	千葉・国立歴史民俗博物館
3	手把銅銃「鳳陽行府□□鎮撫孫英教匠潘茂軍匠李青三斤七両洪武十年月日造」	1挺	全長43.3	明・洪武10年 （1377）	千葉・国立歴史民俗博物館
4	手把銅銃「天字陸萬二百三拾一號　永楽二拾一年玖月日造」	1挺	全長36.0	明・永楽21年 （1412）	千葉・国立歴史民俗博物館
5	四箭銃筒「新製　金貴文　鑿文□会上」	1挺	全長20.6	朝鮮時代 15世紀	千葉・国立歴史民俗博物館
6	勝字銃筒「壬辰九月造小勝字重四斤八両五」	1挺	全長58.8	朝鮮時代・ 万暦20年(1592)	千葉・国立歴史民俗博物館
7	◎伝　ポルトガル初伝銃	1挺	全長98.0	室町時代 16世紀	個人（種子島開発総合センター「鉄砲館」寄託）
8	○伝　八板金兵衛清定作　火縄銃（国産第一号銃）	1挺	全長100.0	室町時代 16世紀	個人（種子島開発総合センター「鉄砲館」寄託）
9	火縄銃関連出土資料	一括		室町時代 16世紀	大分県教育庁埋蔵文化財センター
10	火縄銃「芝辻理右衛門作」徳川家康所用	1挺	全長123.3	安土桃山時代 16-17世紀	静岡・増善寺（静岡市文化財資料館寄託）
11	火縄銃（東南アジア）	1挺	全長157.0	18世紀	千葉・国立歴史民俗博物館
12	大鉄砲「四かいなみ」	1挺	全長281.5	安土桃山時代 17世紀前半	個人 （佐伯市歴史資料館寄託）
13	火縄銃「摂州住／井上関右衛門為次」	1挺	全長112.0	江戸時代 17世紀	東京・靖国神社
14	火縄銃「摂州住／榎並屋佐兵衛作」	1挺	全長129.1	江戸時代 18世紀	個人
15	火縄銃「地鉄剣巻張／摂州住井上関右衛門作宗次（花押）」	1挺	全長128.2	江戸時代 18世紀	個人
16	脇差「祐光」	1口	刃長46.7	室町時代 16世紀	千葉・国立歴史民俗博物館
17	火縄銃 「惣巻張　備前畠田横山木工右衛門祐高」	1挺	全長130.5	江戸時代 18世紀	千葉・国立歴史民俗博物館
18	火縄銃「不倚／土州住伊藤勝平輝秀作」	1挺	全長117.0	江戸時代 18世紀	千葉・国立歴史民俗博物館
19	改造管打銃「巻張　阿州大嶋房三助」	1挺	全長129.5	江戸時代 19世紀	千葉・国立歴史民俗博物館
20	火縄銃（薩摩筒） 無銘　カラクリ銘「種子嶋住常行」	1挺	全長108.3	江戸時代 18世紀	宮崎・都城島津邸
21	火縄銃（薩摩筒） 「日州住入水幸左衛門藤原篤昆」	1挺	全長116.2	江戸時代 18世紀	宮崎・都城島津邸
22	稲富流砲術奥義秘伝図巻	1巻	全長1112.0	江戸時代・ 寛永6年(1629)	福岡・九州国立博物館
23	中嶋流炮術管闚録	2冊	縦27.6×横18.4 縦27.3×横19.4	江戸時代・ 嘉永元年(1843)	千葉・国立歴史民俗博物館
24	国友鉄炮記（国友助太夫家文書）	1巻	全長216.7	江戸時代 17世紀	個人（長浜市長浜城歴史博物館寄託）
25	火縄銃「惣巻張　江州国友彦右衛門知忠」、台師銘「次田重右衛門曽貫作（花押）」	1挺	全長132.0	江戸時代 18世紀	千葉・国立歴史民俗博物館
26	火縄銃「肥前唐津住國友文五郎嬉之作」	1挺	全長135.0	江戸時代 18世紀	個人
27	捕鯨銃「国友卯十郎典吉作」および ボンブランス	1組	全長98.6 全長54.0	明治時代 19世紀	長崎・平戸市生月町博物館・島の館
28	火縄銃「総巻張／阿州石川（以下不詳）」	1挺	全長136.8	江戸時代 18世紀	個人
29	火縄銃「出来助右衛門正章（花押）」	1挺	全長133.3	江戸時代 18世紀	個人

火縄銃の主な産地と展示作品の所在地



種子島・門倉岬

会　場／九州国立博物館 4階
　　　　文化交流展示室 第11室
会　期／平成28年7月12日（火）～9月4日（日）
開館時間／午前9時30分～午後5時（入館は午後4時30分まで）
休 館 日／7月19日（火）、7月25日（月）、8月1日（月）、
　　　　8月8日（月）、8月22日（月）、8月29日（月）
観 覧 料／一般430円（220円）、大学生130円（70円）、
　　　　高校生以下・18歳未満および満70歳以上の方は無料

※学生証等の提示をお願いします。
※（ ）内は団体料金（有料の方が20名以上の場合）。
※平成28年7月16日（土）～8月28日（日）の期間は、特別展「東山魁夷 自然と人、そして町」の半券でもご観覧いただけます。
※障害者手帳等をご持参の方とその介護者1名は無料です。展示室入口にて障害者手帳等（詳細についてはHP等をご確認ください）をご提示ください。
※高校生以下・18歳未満および満70歳以上の方は、展示室入口にて生年月日がわかるもの（生徒手帳、健康保険証、運転免許証等）をご提示ください。
※キャンパスメンバーズの方は無料でご観覧いただけます。展示室入口にて学生証、教職員証等をご提示ください。

NTTハローダイヤル 050-5542-8600
（午前8時～午後10時／年中無休）

［公共交通機関］
■西鉄電車＝西鉄福岡（天神）駅から西鉄天神大牟田線（特急約13分／急行約17分）で西鉄二日市駅乗り換え、西鉄太宰府線（約5分）で西鉄太宰府駅下車、徒歩約10分　※特急/急行料金不要
■JR＝JR博多駅からJR鹿児島本線（快速約15分）でJR二日市駅下車、JR二日市駅から西鉄二日市駅（徒歩約12分、バス約5分）、西鉄二日市駅から西鉄太宰府線利用
■西鉄バス＝博多バスターミナル（1階11番のりば太宰府行き）から西鉄太宰府駅下車（所要時間約40分）、徒歩約10分

［車］
■九州自動車道＝太宰府ICまたは筑紫野ICから高雄交差点経由で約20分
■福岡都市高速＝水城出口から高雄交差点経由で約20分
■タクシー利用＝JR二日市駅から約15分・福岡空港から約30分

駐車場（有料）には限りがございますので、予めご了承ください。

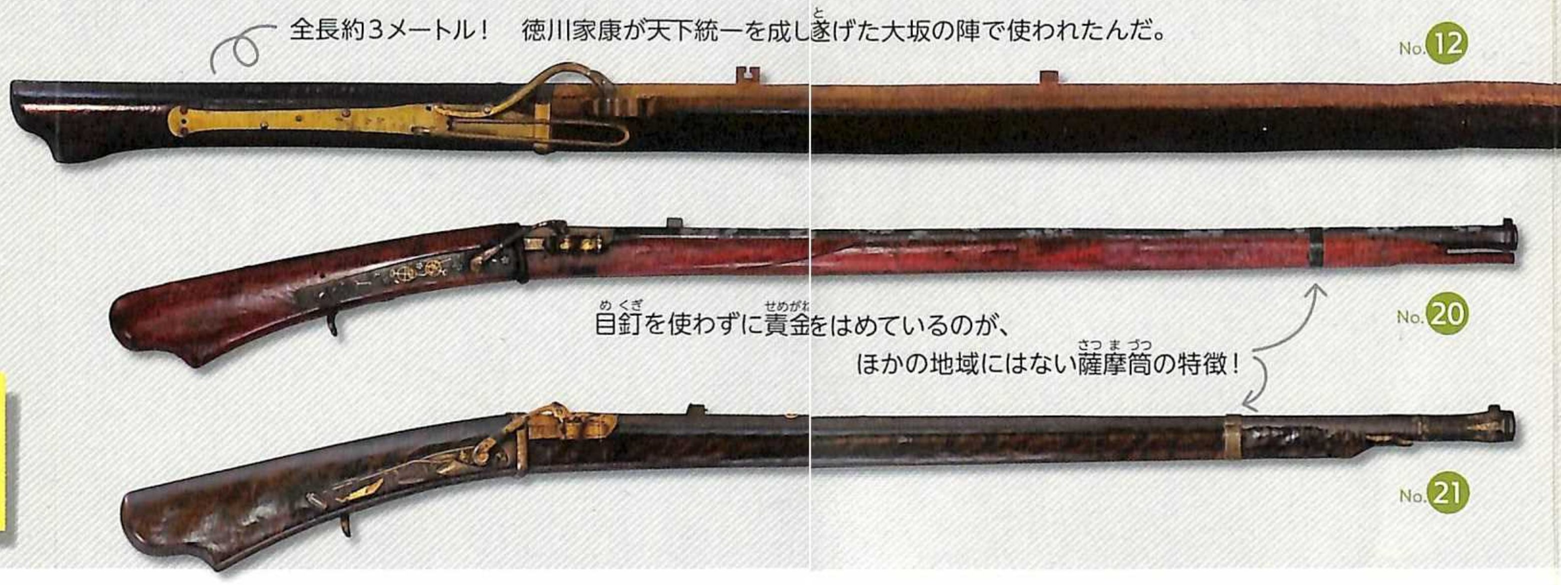
KYUSHU NATIONAL MUSEUM
九州国立博物館
〒818-0118 福岡県太宰府市石坂4-7-2（太宰府天満宮横）
http://www.kyuhaku.jp

写真提供：種子島開発総合センター「鉄砲館」

もっと知りたい！火縄銃のこと

「鉄砲伝来の地」として知られる種子島。西之表市の種子島開発総合センター「鉄砲館」では、約100挺にものぼる国内外の火縄銃が一堂に展示されています。また、火縄銃がなぜこの地に到来し、また国産化に成功したのかについても、島の歴史や風土に注目しながら分かりやすく解説しています。火縄銃について更に知りたい方は、ぜひ訪ねてみて下さい。また、西之表市では、種子島最大のお祭りである「種子島鉄砲まつり」が毎年8月に開催されており、勇壮な火縄銃の射撃演武などが行われています。

種子島開発総合センター「鉄砲館」
【時間】午前8時30分～午後5時（入館は午後4時30分まで）
【休館日】毎月25日（7・8月は除く）
〒891-3101鹿児島県西之表市西之表7585番地
TEL 0997-23-3215　FAX 0997-23-3250


全長約3メートル！　徳川家康が天下統一を成し遂げた大坂の陣で使われたんだ。

No.⑫

目釘を使わずに責金をはめているのが、ほかの地域にはない薩摩筒の特徴！

No.⑳

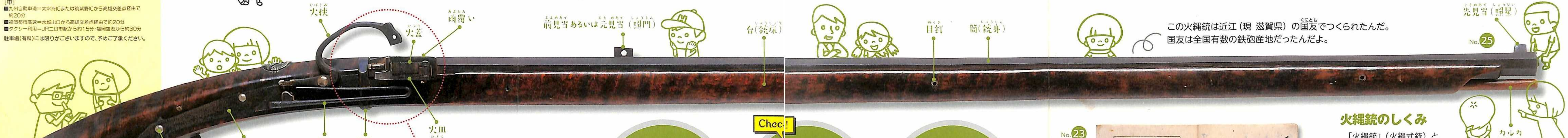
No.㉑

トピック展示

火縄銃の世界

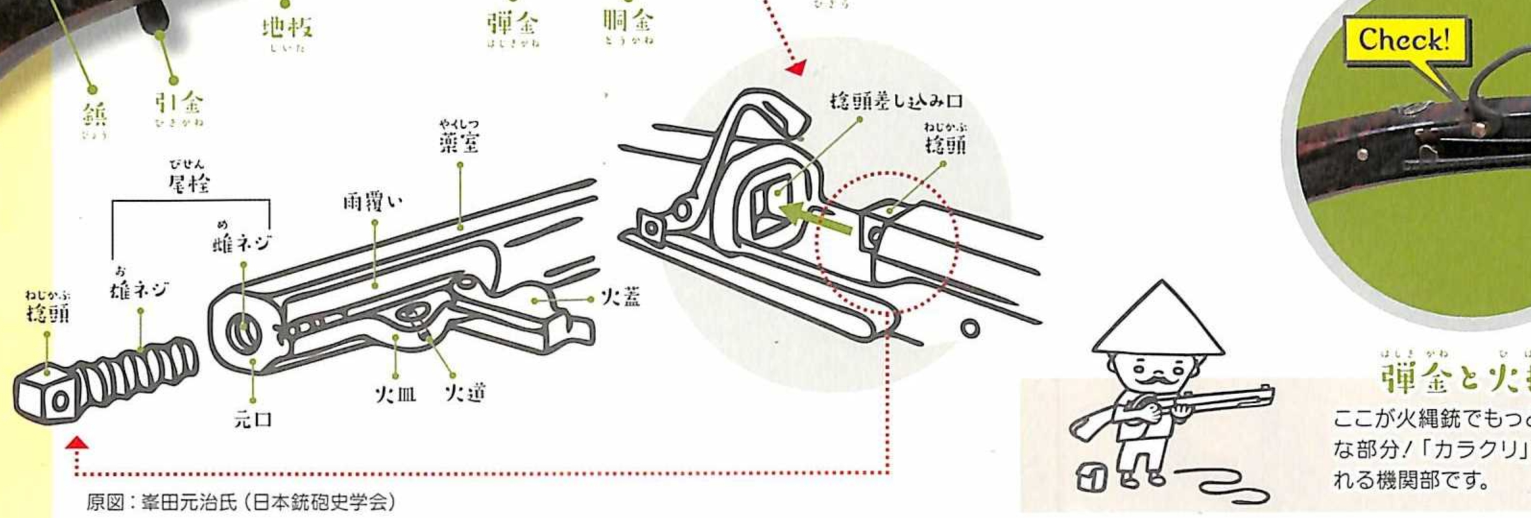
Feature Exhibition
The Matchlock Guns of Japan

平成28年
7/12㊋
▼
9/4㊐

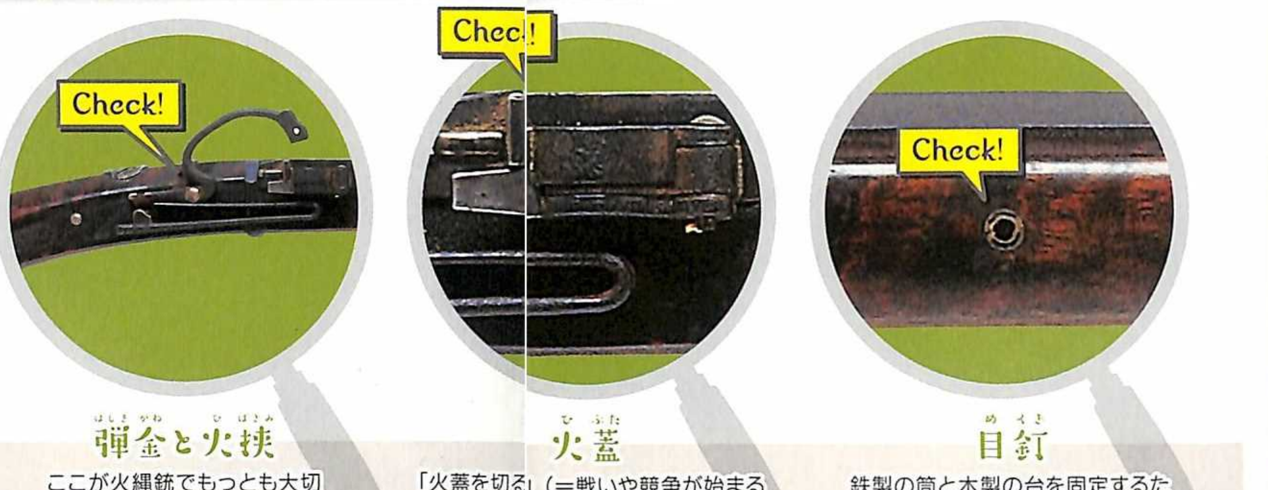


この火縄銃は近江（現 滋賀県）の国友でつくられたんだ。国友は全国有数の鉄砲産地だったんだよ。

No.㉕



原図：峯田元治氏（日本銃砲史学会）

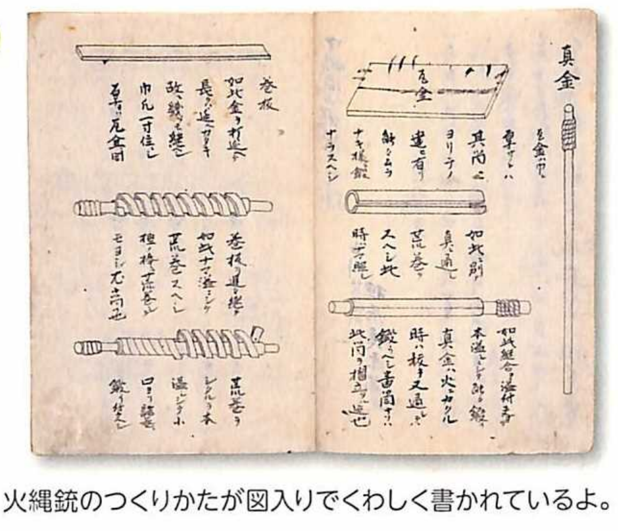


弾金と火挟
ここが火縄銃でもっとも大切な部分！「カラクリ」と呼ばれる機関部です。

火蓋
「火蓋を切る」（＝戦いや競争が始まること）の語源はこれ！火蓋を開く（＝切る）ことで、点火の準備に入ります。

目釘
鉄製の筒と木製の台を固定するためになくてはならない部分です。この火縄銃には3箇所あります。

No.㉓


火縄銃のつくりかたが図入りでくわしく書かれているよ。

火縄銃のしくみ

「火縄銃」（火縄式銃）という名前は、その点火方法に由来しています。火縄とは、木の皮や竹の繊維などを縒り合わせて作った縄のこと。引金を引くと、火鋏に付けた火縄が、バネ仕掛けで火皿に落ちます。すると、この火縄についている火が火皿から銃身内に入り、あらかじめ銃口から詰めておいた火薬が爆発して、弾丸を撃ち出します。

火縄銃は、鉄製の銃身とそれを支える木製の銃床、そして点火用のカラクリを組み合わせてつくられています。火縄銃の各部分には、それぞれ特徴的な呼び方があります。そのなかには、現代の私たちも使っている慣用句のもとになった言葉もあります。